

俺は今からある一大イベントをする。

一大イベントというと明るいもののような感じがするが、自分の場合はそうではなかった。辛くて、苦しくて、時には思い出すと怒りの感情が蘇ってくるものと言った方がいいのかもしれない。それは「家出」だ。

別に「家出」を思い出すと怒りが湧いてくる、というわけではない。「家出」をするきっかけとなった出来事を思い出すと怒りの感情が蘇ってくる、という意味だ。

ずっと逃げ出したかった。不平等すぎるこの世界に。

俺は大きなため息をついて、スマホを黒色のショルダーバッグの中に入れ自室を出ると、カレーの香ばしい匂いが鼻腔をくすぐった。どうやら今晚のご飯はカレーらしい。

直階段を降りると、カレーの匂いがより強くなった。

右側にある居間へと繋がる部屋に入り台所を見ると、お母さんが大きな鍋の中に入っているカレーのルーを鼻歌を歌いながらかき混ぜていた。

自分の息子が家出をしようって時に鼻歌かよ。

呆れた俺は、何も言わずに玄関の方へと向かった。座って靴紐を結んでいるとスリッパが床に擦れる音が近づいてくるのが聞こえた。

「あら、彩ちゃんそこに居たの」

お母さんが俺のことを『彩暉』ではなく『彩ちゃん』と呼ぶ時は百パーセントと言いつついいほど酔っている。俺は大きなため息をついて立ち上がる。振り返ると、お母さんの目はとろんとしていた。頬もほんのりと赤くなっている。

「なに、そんなに怖い顔して。どこか出掛けるの？」

能天気な声で俺の右肩を何度も揺さぶる。

「そうだけど、なんか用？」

睨みつけながらぶっきらぼうに答える。その言葉にお母さんはふざけたように笑って「いやあ、ご飯が出来たからねえ」と甘えた声を出す。息子が若いかったいいお兄さんにでも見えてるのだろうか。

そんなことを考えた時、心の中を支配していた苛立ちが増してきた。

「家出するから」

そう吐き捨てて玄関ドアの取っ手を握った時、右肩を強く引っ張られ玄関ドアに肩を押し付けられ、前を見るとお母さんの顔が目の前にあった。少し斜視になった目が俺の目を

じっと見つめていた。

「……なんだよ」

睨みながら言う。「ううん、なーんにもないよ」と再び能天気な声を出し、俺の肩から両手を離れた。

ドアを開け、俺は閑散とした住宅街の中を探索するように歩いた。

いつも歩いている景色が夜になると全く違う景色に見えるのはなぜだろうという考えがふと頭の中に浮かんだが、それはきつと家族が居るからだという考えに至り、そのことについて考えるのはすぐに止めた。

目の前にある景色に集中しようと視線を空に移すと、白い二階建てのベランダに電飾りのサンタとその周りに光る紫や緑のイルミネーションが飾つてあるのが目に入った。

「……ああ、もうクリスマスか」

明るい住宅街の明かりが灯されている道の真ん中でひとり呟く。白い息が自分の顔の前に現れて静かに消える。

その白い息が小さい幽霊のように見えて、今度は冷たい空気を吸いわざとらしく吐いてみる。

やっぱり幽霊みたいだ。

さっきの苛立ちはどこへやらと、自分は意外と単純なのかもしれないという意味も込めて俺は小さく笑った。

俺の足はこの住宅街の中では少し大きな公園である青空公園あおぞらへと向かっていた。

青空公園は俺が幼稚園の頃によく両親に連れてきてもらっていた思い出の場所だ。でも卒園と同時に離婚しお母さんに引き取ってもらってからは一度も来てなかった。というように来れなかった。

その理由は唯一のお父さんとの記憶を消したくなかったのかもしれないし、過去に継り付きたいだけだったのかもしれない。いずれも自分自身では分からなかった。

青空公園に着くと住宅街とはまた違う空気を漂わせていた。小さい頃に遊んでいた滑り台はいつの間にか無くなっていて、街灯とジャングルジムが対照的な位置に建っていた。そのジャングルジムが青色だということは、近づいてから分かった。

俺は右側にある三メートルくらいの高さがあるジャングルジムの頂上に登る。地上より冷たい空気が肌を刺すように刺激する。ジャングルジムの棒も氷のような冷たさだった。

ジャングルジムの上から地面を見下ろすと、二センチくらいの雪が積もっていることに気が付いた。そう言えば昨夜は雪が降るなんて言ってたような気がする。

足を棒から離し、ブラブラとさせていると、ふとジャングルジムの頂上に登って手を振っている両親に手を振り返している幼稚園の頃の記憶が蘇ってきた。

自分が覚えてないだけで、体にはちゃんと当時の記憶が残っている。そんな自分が嫌になる。

溜め息をついて空を見上げると、真っ暗な夜でも雲が出ていることが分かるくらいの雲が広がっていた。水分を含んでいるかに関わらず夜の雲は太陽が昇ってる時に見る雲とは想像がつかないほど独特な色を放つので、なんだか不気味に思えてくる。

再び溜め息を付き、ジャングルジムを降りて入り口から見て左側にある街灯から少し離れた場所にある一メートルくらいの大きさの水溜りを覗き込んだ。昨夜の雪が解けたのか、水溜りの端に小さな雪の粒が何個か転がっていて、水溜りの中は淡い光を放っている街灯を背景に、俺の姿が水面に映っていた。街灯の逆光なのかただ夜だからなのか、俺の体は影のように真っ暗で自分の顔すら確認することが出来なかった。

なんとなくその水溜りに足先を踏み入れる。すると水面に映っていた影のような俺の姿と街灯はゆらゆらと水面を揺らし、波がおさまるとまたさっきと同じように元の形に戻る。

俺はその現象がどこか懐かしく思えて、今度はさっきより強く水溜りに足を入れる。水しぶきが飛び散り、ズボンの裾が少し濡れる。靴に水が入り、靴下が濡れたと思い水溜りから足を離れた時、この時期としては少し暖かい追い風が吹いた。

視線を感じて後ろを振り返ると、俺と同じくらいの身長の子のショートボブの女の子が立っていた。でも、その子は白い無地のシャツにショートパンツという十一月下旬にはあまりの季節外れな服装をしていた。

「その君、大丈夫？」

にこやかに微笑みながら女の子は話し掛けてくる。話し掛けてくるとは思ってなかった俺は「大丈夫です」と答えた。今の状況を把握できず、思わず声が裏返る。

「大丈夫そうには見えないけどね」

耳に付けていた黒色のイヤホンを右手で外しながら女の子は近づいてくる。

「私の名前はミツキ。君の名前はなんて言うの？」

「……彩暉。吉田彩暉」

徐々に近づいてくるミツキに俺は一定の距離を取りながら後ずさりをする。

「ふーん、彩暉くんか。いい名前だね」

それでもなお俺に近付いてくる彼女の顔は気付けば目の前にあった。

「君、家出してきたでしょ？」

足に何かが当たり思わず尻もちをつく。尻もちをついた場所が地面じゃなくベンチだということが分かったのは、背中に冷たくて硬い背もたれが背中に勢いよく当たったからだ。

彼女は何か企んでいるような顔をしながら後ろに手を組み、ゆっくりと足を踏みしめながらさつき立っていた場所へと戻っていく。

「君は全てが嫌になって『家出』をして、両親との思い出がある小さい頃に遊んでたこの公園に来た」

さつき現れた場所に戻ったミツキは俺と向かい合い、俺の顔を覗き込むように話し掛ける。彼女の後ろにある生垣が穏やかな風に吹かれてザザザと音を立てる。

「でも卒園と同時に離婚した父親のことを忘れられずに」

「ちょ、ちょっと待てよ」

俺は勢いよく立ち上がり、ミツキの言葉を遮る。

「君はなんなの？ 急に現れたと思ったら俺の心を読んだ感じのこと話して」

「何って」

小さく咳払いをして、真っ直ぐな目で俺の目をじっと見つめた。

「幽霊だよ」

単調な声で言った。

「幽霊……？」

彼女の言葉に混乱する。数メートル離れた場所にいるミツキの身体を凝視する。

暗くてよく見えないが少なくとも身体は透けてないし、足も浮いてない。かと言って色白、というわけでもない。第一、幽霊になった人って自分から幽霊って言うのだろうか。

でも、この寒い時期に真夏のような格好をしているのだから、服装だけを見たら幽霊と言われても筋が通る気がする。

「そう、幽霊」

ミツキは頷き、「幽霊だから君の心を読むことが出来る」と人差し指を立てながらわかる？ という感じ首を傾げた。

「まあ……」

俺はうん、と頷くが、あまり実感は湧いてない。

「……なら見てて」

俺の心の中を読んだのか、ミツキは右側に植えてあった大きな木に右手を伸ばす。その手は触れることなく彼女の手を通してしまった。

「見ての通り、私は物や人間、植物に触れることが出来ない。でもひとつだけ例外がある」

そう言って右ポケットから取り出したのは、イヤホンが繋がった黒い音楽プレイヤーだった。

「これはまあ、私の形見みたいなものなんだけど、これだけなら触れることが出来る」

音楽プレイヤーを持ち上げながら、時計回りに俺のすぐ傍を歩き始め、「逆に君は触れることが出来ないけどね」と付け足した。

「……ミツキはなんで僕が家出してるってわかったの」

じっと見つめるミツキの目を合わせながら聞くと、彼女は「そりゃあ」と噴き出すように笑った。

「そんなの君の格好を見たら分かるよ」

笑いを堪えながらミツキは肩に掛けていた黒いショルダーバッグを指差す。

「だいたい家出するって言うなら、修学旅行で持っていくような鞆を持っていくはずなのに、君はそれを持たずに必要最低限の荷物が入る鞆しか持ってきてない」

必要最低限という言葉を強調しながらミツキは言った。

「何持ってきてる？」

俺の真後ろまで歩いてきたミツキは立ち止まってバッグを指差す。振り返っていた俺は自然とミツキと目が合う。

「スマホだけ……」

白色のスマホを出しながら言うと、「そうだね」と頷いて再び後ろに手を組んで歩き出した。

「家出する人は連絡が取れる携帯、言い換えるとスマホは置いてくるの。スマホの画面に

メッセージの通知とか来てたら『帰りたい』って無意識に思っちゃうし、バッテリーの消費が激しくなっちゃうから」

右側をゆっくり歩いているミツキを横目に俺はスマホのロック画面の通知欄を見る。酔っているとはいえ、流石に心配になったのかお母さんからは数十件を超えるメッセージが届いていて、百パーセントに充電されていたバッテリーも十パーセント弱減っていた。

「でも君はその連絡手段を絶つはずの携帯を持ってきてるってことは、家出する気なんて本当はなかったんじゃない？」

歩き始める前の位置に戻ってきたミツキは小さい子に問いかけるような優しい顔をしながら俺の顔を覗き込んだ。

自分の感情が分からなかった。

小学校を上がった頃からいじめの対象になった俺は、家に帰る度に泣きじゃくって「どうしてお父さんが居ないの？」と毎日のようにお母さんを問い詰めていた。でも、不安なことや心配なことがあるとお酒を浴びるように飲む癖のあるお母さんは、俺が自室に戻ったあと毎回のようにお酒を大量に飲んでいて。泥酔しながら泣きわめくお母さんを見てると、胸がギュッと締め付けられた。自分の言動でお母さんを苦しめているのかもしれないと、俺はその日から学校でいじめを受けても「楽しいから大丈夫だよ」の一言で済まして、自分の気持ちを誤魔化していくようになった。

自分は今、どうしたいんだろう。

「困ってるなら、助けるよ」

優しく微笑みかけるように言ったその言葉に思わず泣きそうになる。

「……いいよ、ミツキに迷惑かけちゃうし」

俺は下を向いたまま首を振る。

「私は君の味方だから」

そう言ってミツキは右手を俺の前に差し出した。

「ただいま」

玄関ドアを開けると、お母さんは慌てた様子でリビングから飛び出してきた。

「彩暉……!」

そう言って俺を強く抱きしめる。涙ぐんでいたお母さんに俺はごめんと謝る。

酔いはすっかり冷めているようだった。先程家を出る前に香っていたカレーがの優しい香りが俺達を包み込む。

「いいのよ、無事に帰って来てくれたらお母さんは嬉しいから」

そう言ってお母さんはさっきより強く抱きしめた。

「ねえ、なんでドア開けたままなの？」

ハグをし顔を見合わせた後、お母さんは開いたままの玄関を不思議そうに見つめた。振り返るとそこには開いたドアの前で俺とお母さんの姿を見守るミツキの姿があった。

「なんでってミツキが」

そう言いかけた時、ミツキが幽霊だったことを思い出す。

もしかして俺以外の人には見えないのだろうか。

「ミツキが……何？」

不審そうに聞くお母さんの不安を拭うように、俺は「ううん、何でもない」と誤魔化しご飯を食べる為にリビングに向かった。四人掛けのテーブルの上には大きな皿に盛られたカレーが湯気を立てていた。

俺はいただきますと手を合わせ、ご飯の上にかかっているルーを口に入れた。

「お母さん、美味しい」

頬張りながら言うと、お母さんは懐かしそうに笑った。

「珍しいわね、彩暉から『美味しい』って言う言葉が出るなんて」

「俺だってそりゃあ『美味しい』って思うよ」

そう言いながら、カレーを口に運ぶ。

「違うそういう意味じゃなくて、久しぶりに彩暉から『美味しい』って言う言葉を聞いたなって思っ」

お母さんは嬉しそうに微笑む。

「そんなに美味しくそうに食べる彩暉本当に久しぶりに見てお母さん安心した」

自然とお母さんと目が合う。

照れくさくなって俺達は笑った。

「ごちそうさま」

ほぼ同時に食べ終わった俺とお母さんは手を合わせ、食器を流しの方へ持っていく。

「何かあったらいつでもお母さんに相談していいからね」

後ろに付いて来ていたお母さんが言った。

うんと頷き、自室に上がってドアを開けると、ミツキは五畳ほどの広さのある部屋のドアの真正面にある机の前に体操座りでイヤホンをつけて音楽を聴きながら座っていた。

「ご飯美味しかった？」

当たり前のことなのに、幽霊が言うとなんだか不思議な気持ちになる。俺は「美味しかったよ」と答え、机の左側にあるベッドの上に座る。綺麗に整えられた白くて無地の布団がしわを作る。

「私が君以外の人に見えてないってよく気が付いたね」

少し長い沈黙の後、ミツキが振り返りながら俺の顔を見た。いつの間にか彼女は俺の目の前に移動していた。

「いや、お母さんの反応を見たら明らかだろ。ドア開けたままにしてたら入ってくるのになって思ってたら入ってこないし」

ほんとびっくりだよ、と目線をスマホからミツキに移した時、ふとおくれ毛の半分を金色に染めていることに気が付いた。

さっき会った時は黒髪のはずだったのに、と俺は混乱する。

「え、ねえ、もしかして今髪色に気付いたの？」

おくれ毛の毛先をクルクルと人差し指に巻きながらミツキは驚いた様子で俺の顔を見た。

「公園で会ったとき気付かなかったの？」

「いや、それは周りが暗くてよく見えなかったからで……」

曖昧に言うのと、ミツキはふてくされたような顔をした。

「吉田くん絶対それじゃあモテないよ」

「いや、まず友達いないし」

「知ってるよ」

ミツキは俺の前に立ち上がり、自然と彼女を見上げるような形になる。

「だから、私は君の前に現れたの」

そう言ってミツキはへっつと可愛らしい笑顔を見せた。

「明日さ、学校行ってみようよ」

立ち上がっていたミツキはその場にしゃがみ込み、今度は俺の顔を覗き込んだ。

「なんだよ急に」

俺はベッドの上で座り直し、ミツキに背を向けた。

「友達作りたいんでしょ？」

「そりゃまあ……」

正直言うと俺は高校生になっても友達というものに縛られていたかと思っていた。何より今まで自由にできていたことが友達を持つことによってそれが出来なくなる。でも、その感情と同じくらい友達が欲しいとも思ってた時期もあった。それはお母さんの喜ぶ顔を見たかったのかもしれないし、自分の欲求を満たしたかっただけなのかもしれない。

俺はどっちでもいいという意味を込めて曖昧な返事をする。

「いいじゃん、一度は友達作ってみたいって思ったことがあるならきつと大丈夫だよ。行ってみよ」

笑いながらベッドの上に向かってくるミツキ。音楽プレイヤー以外触れられないんじゃないかねーのかよと心の中でツッコむ。

「ベッドとかは別だよ？　なんだろう、意図的に触れたいって思うみたいな物には触れられない」

意地悪そうな顔で笑いながら、俺の目を見つめる。

「わかったよ」

溜め息をつきながら再びミツキに背を向けると、「ありがと」と嬉しそうな声が聞こえた。

いつものように二十三時にベッドに入ったが、緊張と不安で一睡もできなかった。

俺はベッドから立ち上がり、洗面所で顔を洗い自分の顔を鏡で見る。パツと見はわからないが、瞼の下は隈が薄っすらとできていた。覚束ない足取りで階段を降り、俺はお母さんがご飯を作っている台所に向かう。

「彩暉おはよう」

台所に立つとお母さんがトースターで食パンを焼いていた。「おはよう」と言いながらトースターの中を覗き込むと、食パンの上にはサイコロくらいの大きさに切られたバターが良い感じに溶けていた。

「珍しく早いけど、学校に行くの？」

後ろからお母さんの嬉しそうな声が聞こえた。うんと俺は頷きながら立ち上がると、溢れるほど入った缶がゴミ箱に入っているのに気が付いた。それは、昨夜お母さんは浴びるようにお酒が飲んで泣いたことを意味していた。俺はそれに気づいてないふりをしてお母さんからいい感じに焼けたパンの皿を受け取って食べた。

「いつてらっしゃい」

玄関前で見送っているお母さんとミツキの声が重なる。俺はお母さんに緊張を悟られないように出来るだけ明るい声で「行ってきます」と返事をして手を振った。すると二人は優しい顔で微笑みながら手を振り返してくれた。

俺が通っている高校は家から三駅離れた場所にあった。家の最寄駅からは徒歩で行ける距離で、切符を買って改札を通る。朝の七時半という時間のせいか、人はそれなりに居た。これくらい人が居たら満員電車は逃れられないなと思ったが、乗った車両に人はそんなに居なかった。

三駅はあつという間に過ぎ、高校の最寄り駅に着いた。棒のように重くなった足を必死に動かす。最寄り駅に着くまでは何ともなかった心臓が、急にうるさくなって過呼吸を起しそうになる。

きつと久しぶりに会う同級生に緊張しているだけだと誤魔化しながら、校門を通る。

何人かの同級生や先輩の間を通り抜け下駄箱に着いた時、ふと自分の上履きがちゃんと下駄箱の中に入っているか不安に駆られた。

入学して一週間もたないうちに父親が居ないということでのじめの標的になった俺は、私物に落書きをされたり仲間外れにされたりしていた。その中のひとつが上履きを隠されることだった。

扉付きの下駄箱の前に立ち、ゆっくりと扉を開ける。

上履きが入っていた。

ほっと胸を撫でおろして、上履きを床に落として足を入れる。上履きを履いている時に同級生から話し掛けられることを期待したが、俺の横を通り過ぎた人が挨拶してくれることはなかった。

一段一段階段を踏みしめるように上がる。二年生や先生たちが俺の横を通り過ぎる。自分の教室がある三階に着き、教室の中を伺うように足を忍ばせるように歩く。

戦場と化す場で、俺はドアを思いつきり開けた。

教室の中に静寂が流れる。

「おっ、あの吉田が来たぞ」

その静寂を切り裂き指差したのは、俺をいじめている主犯格の男子だった。そいつの髪形はモヒカンで髪をワックスで整えていたので、ナルシスト野郎と俺は勝手に呼んでいた。た。

くすくすと笑う生徒の声が教室に響く。

「吉田君久しぶり〜。元気にしてた？」

ナルシスト野郎とは違う、眼鏡をかけている特にパツとしない男子が俺の苗字を呼ぶ。

いつもは呼び捨てで呼ぶくせに、こんな時だけ優しいフリするなよ。

俺はポケットに手をつ込んで誰とも目を合わせずに自分の席がある一番後ろの中央の席に座った。

いつもならゴミや画鋏が置かれているが、今日はないことに何も椅子の上に置かれてないことに安堵する。

鞆を置いて黒板を見た時、俺の机の周りをいじめに参加してる人たちが囲んでいることに気が付いた。

目の前に居たいじめのナルシスト野郎と目が合い、俺は不安な気持ちを悟られないように素っ気ない態度で目を逸らした。

「お前さあ」

ナルシスト野郎が教室に響くくらいの大声を出す。

その声には俺は思わずびくつく。机の下に置いてる手は震えていた。クラスの人達は黙って俺達を見ている。

「今日何の日か知ってる？」

眼鏡をかけた男子が俺の顔を覗き込む。

「……別に何もないでしょ」

ぶっきらぼうに答える。その答えにクラス中が声を殺すように笑いだした。「おい、こいつマジかよ」と囁く声が聞こえる。

「はいここ、吉田君注目〜」

そう言って女子の中で中心になっているロング髪の子が黒板を力強く二回叩く。そこに

は『今日の誕生日の人』という文字の下に『吉田彩暉』と可愛らしい文字で書かれたのが目に入ってきた。今日、十一月二十日は俺の十六歳の誕生日だった。

その瞬間、入学してすぐに自分の誕生日を紙に書かされたことを思い出した。まるで生まれた日を公開する様な感じがして、嫌々な気持ちで書いた記憶がある。

「お前、自分の誕生日も覚えてないなんて馬鹿じゃねーの」

しゃがみながらナルシスト野郎は俺の顔を覗き込む。目を合わせないように下を向いてると、上から冷たい水が降ってきた。床は水浸しになり、クスクスと笑う声が聞こえる。

「大黒柱のお父さんが居ないから、誕生日プレゼントも貰えないだろ？ だから、オレ達がお父さんの代わりにお前の誕生日プレゼントあげる」

笑いを堪えながら、ナルシスト野郎は立ち上がる。「感謝しろよ」と周りを囲んでいた男達が笑いながら俺の机から去っていく。

「……ふざけるなよ」

俺はゆっくりと立ち上がる。その声にクラスは再び静かになる。

男達は俺の顔を見て「やる気か？」と指の骨を鳴らしながら近づいてくる。俺は手に持った鞆でそいつらを押しつけ、教室を出て校門を出る。

怒りはいじめた奴らではなく、ミツキに向かっていた。

『明日学校に行ってみなよ』

そう言っていたミツキの顔は笑っていた。

心を読む能力があるなら、バッグに入っていたスマホが入っていたことを見抜いたミツキならきつと今日俺が誕生日だってことも知っていたはずだ。

そう考えると、体が沸騰するように熱くなった。

学校を出てからゲリラ豪雨のように降り出した雨は、俺の体を濡らした。

なんで電車に乗らなきゃいけないー距離に家があるんだ。

イライラを抑えながら俺は速足で家に向かい、自室を開ける。お母さんが俺を呼び止める声が聞こえたが、今はそれどころではない。

「おいお前！」

勢いよく自室のドアを開けると、ミツキが驚いた表情をしながら俺の顔を見た。ミツキは昨日と同じ場所で音楽を聴いていた。

「お前、今日俺の誕生日だって知ってただろ?!」

勢いよく胸ぐらを掴みそうになるが、ミツキの身体には触れられることが出来ず、思わずバランスを崩し、机に倒れそうになる。

「誕生日？ え、今日誕生日だったの？」

ヘラヘラと笑うミツキ。悪びれる素振りもなく「おめでとう」と拍手をしている。何がそんなにおかしいんだ。

「心が読めて俺の荷物を言い当てるってことは、俺の誕生日も本当は分かってたんだろ?! でも知らないふりをして今日学校に俺を行かせたんだろ?!」

怒っているはずなのに、目の前が涙で滲む。

「そんなわけないじゃん。私は学校に行ってほしいって思ってたんだよ」
ベッドに座りながらミツキは言う。

「嘘つけよ！ じゃあなんで今笑ってんだよ！」

もう意味が分からなかった。俺は思いつくまま言葉を発する。

「笑ってなんかないよ。ただ『帰ってきたんだな』って思ってた」

「それ馬鹿にしてんじゃない！」

ミツキに対する怒りはあるのに、それを言葉にすることが出来ない。そのことがもどかしくて大きなため息をつく。

「何、みんなしてそんなに俺をいじめるのが楽しい？ ミツキなら信頼してもいいって思ってたけど、ミツキまでそんなことするんだね。見損なっちゃよ」

俺は学生鞆を床に叩きつける。金属の水筒が鈍い音を鳴らす。

「……なんでそうやって人のせいにするの？」

女の子が発した声とは思えないような声が出た。数秒遅れてミツキが発した声だということに気が付く。

「君さ、逃げてばかりだよ。私は本当に学校に行けるようになってほしくて言ったのに、なんで『いじめられたのは学校に行けって言ったミツキのせいだ』って言うの？」

沈黙が流れる。

「結局、君は弱いんだよ」

女子が怒ってるのはあまり見たことがないが、本当に怒っているときは感情的にならないのだろうか。

そう思いながら、ミツキが耳に黒いイヤホンをさすのを見る。その時音楽プレイヤーに

白い文字が書かれているのが見えた。

ねえ、と言いかけたが、喧嘩してる最中に話題を逸らしたらさらに機嫌を損ねると思
い、口を噤む。

その感情に気付いたのか、ミツキが「この文字のこと？」と表情を何一つ変えることな
く聞いてきた。俺は頷く。

「黙っておこうと思っただけど、気付いちちゃったんだね」

面倒くさそうに溜め息をついて、音楽プレイヤーを俺の机の上に置いた。

「この『浜田 実樹』って言う名前が書かれてるんだけど、私の生前の名前なの」

俺はミツキの真横に行く。ミツキの目はどこか淋しそうだった。

「私は、あなたの同級生だったの」

哀しそうな目をして笑う。その横顔にどこか見覚えがあった気がした。

「私もあなたと同じようにいじめられていたの。話せる人も友達も居なくて、ずっと一人
だった。でも、音楽を聴けば一人じゃないんだって思えることが出来た」

机の上に置かれた音楽プレイヤーを握りしめる。外は大雨が降っているのか、窓に雨が
打ち付けられる音が部屋中に響いていた。

「でも、本当は友達は欲しかった。一緒に話したり、遊んだりして他の人と時間を共有し
たかった」

ミツキの目から涙がこぼれ落ちる。

「私が死んだ日、私の死を悲しんだ人は家族以外居なかった。その時、友達が居たら悲し
んでくれたのかなって思ったの」

ミツキは深く息を吸う。

「だから君には、吉田くんにはこんな思いをしてほしくないの。幸せになってほしいの。
私とは違う人生を歩んでほしいの」

そう言ってミツキは音楽プレイヤーを俺の前に差し出した。

「明日、この音楽プレイヤーを持って行って音楽を聴いてほしいの」

「でも俺には触れられないんじゃない……」

差し出された音楽プレイヤーを俺は両手で受け取る。音楽プレイヤーは触れることが出
来た。

「これを持ってたらいじめられないから、学校に行ってくれろ？」

「……分かった」

この機会を逃したら俺は一生後悔をする気がした。窓を打ち付ける雨はいつの間にか止んで、秒針だけが部屋に響いていた。

こんなに心臓が激しく鼓動してるのはいつぶりだろう。手足は緊張のあまり冷たくなり、気を抜けば倒れてしまいそうだった。

ミツキの言う通り、耳にイヤホンを差し音楽を聴いているといじめられることはなかった。イヤホンを差した直後は「なにお前音楽聴いてるんだ？ ふざけるんじゃないぞ」といじめっ子から罵られたが、無視し続けていると話し掛けてこなくなった。

昼休みになると、教室はいつものように一気に騒がしくなる。

そう言えば昨日、その音楽プレイヤーで音楽を聴いていればある人から話し掛けられる、とミツキから言われた。

音楽プレイヤーを見ても特に目立った文字は書かれてなく、昨日と変わらずミツキの生前の名前と中央に英語のような文字が書かれていた。

筆記体か何かだろうか。習ったことのない文字を凝視していると「ねえ」と女の子の声があった。突然の出来事に体がびくつく。その拍子で脚が机に当たりガタンと大きな音を立て、一瞬だけ沈黙に包まれたが、何事もなかったかのように騒ぎ始めた。

「そんなにビックリしなくてもいいじゃん」

笑いながら女の子は俺の机に手をつく。

「吉田くんって音楽聴いたりするんだ？」

その声には俺は聞き覚えがあった。同じクラスの猶本ゆうもとさんだった。

クラスの中心にいるムードメーカー的な存在の彼女。インナーに明るい茶色に染めていて、校則違反の化粧もしている。俺はそんないかにも人生を謳歌してますアピールをするという人が昔から苦手で、何があっても近づこうとはしなかった。

でも、そんな人が俺に話し掛けている。

もしかして話し掛けられる人って猶本さんのことなのだろうか。

「うん、まあ……」

両手に持っていたミツキの音楽プレイヤーを猶本さんは持ち上げる。

「あ、え、SEKAI NO OWARI 聴くの?！」

耳元で叫ばれたような大声を出し、教室は静かになる。

世界の……終わり？

音楽に疎い俺はポカンとする。もしかして筆記体で書かれた文字のことだろうか

「SEKAI NO OWARI だよー。え、何の曲が好き？」

「……これとかかな」

俺は音楽プレイヤーに表示されている『ANTI - HERO』という曲を指差した。

『ANTI - HERO』か。なんか吉田君そんな感じするもん」

そう言って猶本さんは嬉しそうに笑った。

耳元で騒ぐというのが陽キャの特徴のひとつなのか、正直目障りだった。

やっぱり騒がしい人は嫌いだ。

猶本さんの傍から離れようと立ち上がろうとした時、目の前が真っ暗になった。

次、目を開けた時は白い天井とベッドを囲んでいるカーテンが見えた。

「あ、吉田君起きた……？」

右側から猶本さんの声が聞こえた。彼女はパイプ丸椅子に座り心配そうに俺の顔を見ている。

「急に倒れたからびっくりしたよ……」

安堵した表情で彼女は胸を撫でおろした。

「体調が悪かったの……？」

再び彼女は心配そうに俺を見る。

倒れた理由は自分でも分かっていた。猶本さん自身が苦手な体が拒絶反応を起こして倒れたということは。でもそれを本人に伝える勇氣はなかった。

「いや、別にそう言うわけじゃないんだけど……」

そう曖昧にはぐらかした時、ミツキの音楽プレイヤーのことを思い出した。

「そういえばあの音楽プレイヤーは……？」

ベッドから起き上がりながら聞くと、猶本さんは思い出したかのように自分の鞆からミツキの音楽プレイヤーを取り出し俺に渡した。俺はそれを両手で受け取る。傷などは付いていないようだった。

「……それ、浜田さんのだったんだね」

気まずい沈黙を破ったのは彼女の方だった。俺は小さく頷く。

「……ごめん」

「……何が？」

混乱したように猶本さんは言った。

「実は俺、猶本さんみたいな感じのクラスの中心にいるような人のことが苦手だった。だ

から……倒れた」

長くて苦しい沈黙の後呟いた。

「……私もそっだよ」

一瞬何を言われたのか分からなかった。

「私も苦手なんだよ、ムードメーカー的な存在の子。でも、そうじゃないと皆に嫌われるって思っただけで演じてた」

意外だった。髪も染めて、化粧もしている子が、苦手？ そんなことあり得るのだろうか。

「じゃあ、なんで化粧とか……」

「嫌われなくなかったの。私、幼稚園の時から SEKAI NO OWARI が好きで、演芸会の歌も SEKAI NO OWARI の曲にしたかったの。でも、バンド名が暗くて不吉だから結局しなかったの」

浅い溜め息をつく。

「その時に、本心話しちゃいけないんだって思った。だからそれからずっと周りの人に合わせて生きてきたの。……変な話だよ」

苦笑いしながら「ごめんね、忘れて」と言った。

「……俺達似てるね」

「そっだね」

おかしくなって俺達は笑った。

「友達になってくれる？」

「もちろん」

俺達は同意の意味を込めて猶本さんと握手をした。

翌日から俺と猶本さんはたわいのない話をするようになり、すぐに仲良くなり家に遊ぶことも少なくなかった。お互いが好意を持つのもそう遅くはなかった。

そんなある日家に帰ると、ミツキが SEKAI NO OWARI 以外の曲を流していた。

彼女から音楽プレイヤーを渡されたあの日から、俺は SEKAI NO OWARI の曲を聴くようになり、ある程度の曲名は分かるようになっていた。

でも、今日は SEKAI NO OWARI の曲以外の曲を流している。しかもイヤホンを外し

っ。

珍しくベッドの上で音楽を聴いていたミツキに「その曲なんて言うの？」と床に鞆を置きながら話し掛ける。

「SHE'Sの『Come Back』って言う曲」

体を左右に揺らしながらミツキは答える。

「優しい声してるね」

うん、と微笑みながら頷く。

「私、この音楽プレイヤーに入ってる曲の中で唯一のSHE'Sの曲なんだよね」

「そうなんだ」

椅子に座りながら言うと、ミツキは俺の前に立ち上がった。

「もう私が居なくても大丈夫だね」

「え、何が？」

突然の言葉に混乱する。

「吉田君はもう親しい人が居るから大丈夫だね」

そう言ったミツキの顔は寂しそうに見えた。

「それって、春比はるひが関係してる……？」

ミツキの両肩を掴もうとしたが、通り抜けてしまう。

「さあ、どうだろうね」

悲しいとも嬉しいとも取れる複雑な顔でミツキは笑った。

「もし寂しくなったら、『Come Back』聴いてね」

音楽プレイヤーを小さく振りながら、ミツキはドアを開けて自室を出る。

「ちょっと待てよ！」

閉まりかけのドアを開けると、そこにミツキの姿は見当たらなかった。

ミツキが言った「親しい人」とはどういうことだろう。あの悲しいような嬉しいような複雑な表情の意味はなんだったのだろうか。

階段を一段ずつ手すりを持ちながらゆっくりと降りる。

ミツキは俺が春比に好意を持っていることを知っていたのだろうか。心の中を読めるなら、好意を持っていることを知られても不自然ではない。

「ああ、俺にも心の中の感情を読めたらな……」

そしたらミツキの気持ちにも気付けたかもしれないのに。

情けないなと思いつながら階段の一番下に降りる。するとリビングからお母さんが嬉しそうに俺を見ていた。

「どうしたの？」

今の気持ちを悟られないように、何事もなかったように聞く。

「ミツキちゃん、可愛かったね」

「え？」

俺は思わず耳を疑う。

「お母さん実は見えてたの、ミツキちゃんのこと」

突然の報告に目が泳ぐ。そんなそぶりは一瞬たりとも見せなかったのに。

「覚えてないでしょ。ミツキちゃん、小さい頃遊んでたんだよ」

嬉しそうにお母さんは微笑む。

「うそ」

なんだ、その奇跡みたいな出来事。俺は思わず目を見開く。

「ほんと。なんなら結婚するなんて言ってたよ」

懐かしそうな顔でお母さんは微笑む。

「助けに来たのかもね」

「そうだね」

あの日あの時会ったのは、奇跡でも偶然でもなく必然だったのかもしれない。

そう思うと心が少し軽くなったような気がした。

「今からどこに行くの？」

「……春比のところ」

靴を履きながら言う。

「気を付けてね」

「うん」

そう言って俺は青空公園に向かった。

公園に着くと、ジャングルジムの頂上に座った春比の姿が見えた。

「寒いね」

「そりゃあ、冬だからね」

ミツキが居なくなつたこの世界は静かだつた。

でも、あの時とは違う。隣には大切な人が居て、大好きな音楽がある。

春比の顔を見る。暗くてよく見えなかつたが、白い息が見えたので微笑んだということが分かつた。その笑顔につられて俺も笑う。

「大好きだよ」

そう言つて僕は唇を重ねた。

* * *

「お父さんもお母さんも、なんで僕のことわかつてくれないんだよ！」

こけそうになりながら、僕は青空公園へと向かう。

冷たい空気が肺を刺激する。まだ数メートルしか走つてないのに、息が上がつて苦しくなる。

「お父さんもお母さんも、消えちゃえばいいのに！」

そう言つて水溜りの中に足を踏み入れた時、ふわつと優しい風が吹いた。

そこには白い無地のTシャツにショートパンツを履いたショートボブの女の子が立っていた。

「その君、大丈夫？」

そう言つて女の子はイヤホンを外しながら僕の方に近付いてきた。